

# 郷土研通信



ミズバショウ

アイヌ語名：パラキナ（幅の広い草）

発行：てしかが郷土研究会 北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10  
発行者：松橋 秀和

## 令和六年度 総会開催される

令和六年四月二十四日、会員一二名中九名とオブザーバーとしてふるさと歴史館副館長が出席（出席者は後述）し、弟子屈町公民館研修室において令和六年度の総会が催されました。会議は、会長の挨拶のあと、令和五年度の事業報告がなされ、引き続き令和六年度の事業計画案が提示され審議を行いました。

令和五年度の会計報告が事務局の諸般の事情により会計処理が未了のため次回例会において報告し、併せて令和六年度の予算案を審議することで了解を得ました。

### 令和六年度 事業計画

令和六年度の事業計画は、

#### （1）種市資料の移動

貴重な歴史資料類が数多くあり、現状では利活用

不便なことから歴史館に書棚を設置し移動する計画で、教育委員会も同意しています。

書棚設置資材については当会の予算で一七万円ほどを見込んでいて、作業日程を調整して会員の労力奉仕で行います。

#### （2）ふるさと歴史館の

##### 事業協力及び協同事業

ふるさと歴史館の今年度の具体的な事業計画は詰められていませんが、

- ・町内のチャシ跡見学会
- ・教育委員会担当学芸員と実施に向けて協議を進める。
- ・町内文学散歩

当会々員の山本広氏が作成した『てしかが文学散歩』を基に実施に向けて検討する。

#### （3）当会主催の

##### 研究発表会等

・「てしかが・むかしむか史」の復刊

・会員それぞれが題材を準備して研究し、発行は年四回程度（季刊）を町の広報誌に折り込むなどの方法で実施に向けて準備をする。

・町民を対象とした講演会  
当会の勉強会に町民も聴講できるように上記のことと併せて広報する。

#### （4）勉強会の継続

各会員の研究成果の発表のほかに、今年度は種市資料の移動作業も郷土資料に触れることにもなるので、勉強会は継続する。

#### （5）「郷土研通信」の

##### 発行

当会の活動状況を町民に知ってもらうことに併せて当会の活動に共感する新会員の勧誘にもつながることなので、公民館・図書館・ふるさと歴史館に数部配置する。

#### （6）冊子の販売

以前町の広報誌に掲載していた「むかしむか史」は

広報誌という性格上読み捨てられていた。調査研究の貴重な成果をテーマごとに冊子化し、販売をして当会の活動資金の一部にできれば、このことでもあり、検討する。

このほか、会員からの提案や要望がありました。

・「当会のホームページを作ってはいかが？」

必要事項を調べ開設に向けて準備をする。

・「辻谷守氏の蔵書を見学しては？」

以前に会長と辻谷氏とのお話しで了解を得ているので、日程を調整して実施する。

・要望―議案書に会員名簿を添付されたい。

個人情報特定されない範囲で次回例会に配布する。

○ふるさと歴史館から

・資料展示のリニューアルを計画しており、その作業に協力を願いたい。

・ふるさと歴史館見学会等の際に職員の手が薄くなる際に貴会の協力を願いたい。

以上事務局から提案された事業計画案、会員からの提案、ふるさと歴史館要請事項を協議して承認されました。

☆

総会及び勉強会出席者  
会員 齋藤敬子・小林俊夫・荻野峻宏・安藤心・山本正裕・松橋秀和・平塚一明・小川義雄（会議途中から出席）敬称省略  
オブザーバー  
小見山ふるさと歴史館副館長

# 次回の例会

令和六年五月二十二日（水）

一九：〇〇から

ふるさと歴史館  
（摩周観光文化センター）

令和六年度総会第二回

勉強会

演題

「松浦武四郎さんの

屈斜路コタン滞在記

現代の武四郎さんとイソリツカラの心友物語を添えて」

講師 齋藤敬子さん

# 勉強会

演題

「松浦武四郎さんの

屈斜路コタン滞在記

現代の武四郎さんとイソリツカラの心友物語を添えて」

講師 齋藤敬子さん

前回の演題レジュメ2)の途中から解説がされました。今回は、会員からの補足説明や質問が少なく静かに進行し、3)「久摺日誌」からわかることまで講義されました。

- 1) 現代の松浦武四郎さんって、どんな人？  
～おそらく性格もそっくり!?～
- 2) 「久摺日誌」だけでは、わからないこと  
～イソリツカラという人名はどこに?～
- 3) 「久摺日誌」から、わかること  
～3日間も滞在してくれたので～
- 4) 武四郎さんに教わったこと  
～テシカガという地名は“岩盤の上”で良いのか!?…などなど～
- 5) 後世へ伝えたいこと  
～屈斜路湖畔で刻まれてきたアイヌの生き様～

演題のレジュメ

# むかしむか史写真館

美羅尾山の頂上に昭和三六年九月に日本電信電話公社（電々公社）無線中継所のアンテナが建つ前、昭和三〇年代前半の弟子屈中学校からの風景である。

西に美羅尾山と雄阿寒岳、北側には摩周岳、眼下には釧路川の流れと市街地が望められる弟子屈中学校が建

つところは「岳風台」と呼ばれている。

校舎から道路までの空間には地形を利用して東屋がしつらえられていたり、几帳面な用務員さんの手できれいに整えられた前庭となっていた。また、校庭の片隅には、続縄文時代のものと思われる遺物が時々見つか

ることもあり、先史時代の人々もここを生活の一部にしていた恵まれたところでもあった。

岳風台周辺は、陸上競技場、野球場、温水プール、寄宿舎が次第に整備され、隣接地にあった弟子屈高等学校が昭和三七年に定時制から全日制に認可されて、一帯は課外活動に勤しむ生徒たちの声が響き合い、大志を育む良好な教育環境となっていた。



弟子屈中学校岳風台から美羅尾山を望む